

スマートフォンは「セカンドステージ」の操作法から植木の剪定（せんでい）まで、ちょっとした家事なら何でもお任せを。日常の困りごとを解消してもらおうと、シニア世代が地域住民を支援する取り組みが広がっている。双方を結びつけるのは、ボランティア団体や自治体。シニアが持つ豊富な経験を地域のサポートにつなげる狙いだ。

「きょうは『タップ』という言葉を覚えてください」。5月、東京都八王子市の住宅の一室でスマホ教室が開催された。集まったのは近くに住む60〜80代の高齢者4人。時に戸惑いの表情を見せながらもスマホを手に熱心に聞き入った。講師を務めたのは同市の山川正泰さん（66）だ。この日は、スマホのホーム画面への戻り方や充電のタイミングといった基本的なことから、対話アプリ「LINE」の使い方といった少し高度な内容まで、講義は約1時間に及んだ。受講者の一人、北沢昇さん（78）は「ささいなことについては、携帯ショップのスタッフより、同世代の方が気軽に質問しやす

# セカンドステージ

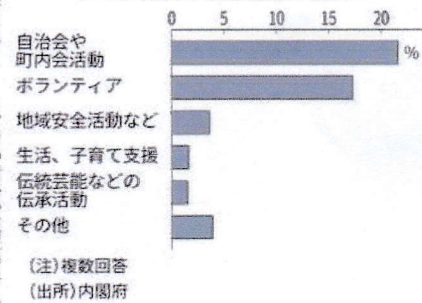
## シニアと地域をマッチング

### 家事お任せ、NPOなど仲介



地域住民にスマートフォンの操作を教える山川正泰さん（奥）

シニア世代の社会活動は幅広い



い。近くに詳しい人がいてくれて、本当に助かっている」と喜ぶ。こうした授業が実現した背景に、同市のNPO法人「めじろむつみクラブ」の存在がある。メンバーは全員が60歳以上。体力自慢のシニアと、日常家事などの手助けを求める住民をマッチングしている。障子の張り替えや電球の交換まで、活動の範囲は幅広い。山川さんもメンバーで、2015年ごろから活動。フリーライターとして毎日のように仕事でスマホやパソコンを使っており、基本操作などに熟知している。昨春にビデオ会議サービス「Zoom（ズーム）」の使い方を地域の高齢者に教えて以降、月4回ほど機器の扱い方を講義する。自身にとっても「住民との交流が深まるうえ、地域のことをもよく知ることができる絶好の機会」と話す。

趣味が高じて技術を身につけたメンバーもいる。斉藤英雄さん（77）は約7年前から植木の剪定を始め、腕を磨いてきた。知人の紹介で19年10月に入会。作業の合間に交わす「気さくな会話も楽しみにしている」とい、網戸や障子の張り替え、包丁研ぎなどでの出番も呼び掛けている。クラブの設立は2002年。特に203〜4年は住民からの依頼が相次いでいるという。ニーズがある介護支援も新たに始めた。坂元芳彦理事長は「退職後も力をあり余らせているメンバーばかり。元気なシニアが地域住民を支える団体を目指したい」と意気込む。

こうした取り組みを後押しする自治体もある。東京都杉並区はシニアに積極的に地域活動に乗り出してもらおうと、「ポイント制」を取り入れている。60歳以上の区民を対象

「パトロール中」と記されたベストを着用し、通行人へ声を掛けたり児童の下校を見守ったりして、地域の安全を守る。以前は見回り活動がなく、住民の要望が多かったという。パトロール隊長の80代男性は「子どもの見守りなど、地域活動に貢献したいと考えているシニアは少なくない。ポイント制はモチベーション。より多くの人に参加してほしい」と呼び掛ける。

地域が求めるニーズは増えており、シニアが活躍する場は広がっている。同区の担当者は「趣味やスキル」の延長で構わないので、関心のある分野を見つけて参加してほしい」（高齢者施策課）と話している。（中村信平）